

慧能禅師(えのうぜんじ)

令和2年7月第4週放送

お釈迦様から数えて三十三代目、中国では禅を伝えた達磨大師から数えて六代目にあたり、曹洞宗の系譜に連なる方が慧能禅師です。中国で唐の時代、七世紀半ばから八世紀初めに活躍されました。現在の^{かんとうしやう}広東省にお生まれになりましたが、三歳で父親を亡くし、母親との厳しい生活を余儀なくされたといひます。

ある日、町に薪を売りに行ったところ、^{こんごうきやう}『金剛経』を唱える人物と出会い、その方から現在の^{こほくしやうおうばいけん}湖北省^{こうにんぜんじ}黄梅県にいる弘忍禅師の存在を聞き、入門を志願してその下を訪れました。当時の中国では南の地方はおくれた地であるという風潮があり、慧能禅師は弘忍禅師に南から来たと追い出されそうになるものの、人に備わるとされる仏性には南北の違いはありませんと答え、^{うす}碓^{てらおとこ}を踏む寺男として留まることを許されます。しかしこの問答を通じて、弘忍禅師も一目置く存在となりました。

時は流れ、弘忍禅師は世代交代を考える頃となり、修行僧たちに自分の^{きやうがい}境涯を詩にしたためて提出するようと呼びかけました。すると当時、修行僧の第一座と誰もが認めていた^{じんしゆう}神秀が「我が身は菩提の樹であり、我が心は何でも映し出す鏡と同じ。常にそれらを清め、^{ちり}塵^{ほこり}や埃を取り除き続けることだ。」という詩をまず提出しました。それを見た慧能は「菩提の樹である我が身も、澄んだ鏡である我が心も実体のあるものではなく、全てはもともと変わらぬ存在ではない。有るという

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

塵も埃も妄想に過ぎない。」と、神秀の詩を喝破するかのような詩を提出しました。その結果、五祖弘忍禅師は慧能を自分の後継者、六祖慧能禅師として認めたとはいえられています。但しその継承による混乱を案じて、暫くの間身を隠すようにと慧能禅師は諭されたのでした。

それから十年余り経ち、『涅槃経』^{ねはんきょう}を講ずる印宗法師^{いんしゅうほうし}の下に慧能禅師は一聴講者としていました。ある日、寺の外にたなびく幡^{はた}を前に二人の僧侶が「これは幡が動いているのだ。」いや「これは風が動いているのだ。」と論争していた折、「それはあなたたちの心が動いているのだ。」と慧能禅師は答えました。その話を聞き及んだ印宗法師に見出され、禅の継承者として六祖慧能禅師がここに登場したのです。以後広く教えを説き、その教えは『六祖壇経』^{ろくそだんきょう}として現代に伝えられています。そして慧能禅師は、生まれ故郷に近い広東省韶関^{かんとんしょうしょうかん}の地に曹溪山宝林寺^{そうけいざんほうりんじ}を再興し、戒と坐禅をもとにした修行を生涯七十六歳まで続けたのでした。

禅の世界に身を投じて以来、人の持つ仏性の可能性を信じ続け、それを働き出させるべく邁進した偉大な禅の祖師、それが六祖慧能禅師なのです。

— 終 —